

# 佐賀県立博物館報 №44

佐賀市内1丁目15番23号 TEL 0952(24)3947



(42図)部分

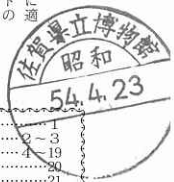
## 磔刑

悲しみの表情をとって居並ぶ聖女たちの目には、涙が一筋輝いて光っている。対称的な構図で直立に静止した人物群。すべての視線は、キリストの苦しみに集中してゆく。イエス・キリストは、ローマ総督の命により捕え

られ、エルサレム近郊の丘で、当時奴隷に適用されていた磔刑に処せられた。キリストの足下には、聖母マリアの嘆きが、まだスペイン化されない崇高な美しさの中に描かれている。

## 目次

●磔刑	1
●開館要領・スペイン美術の流れ	2~3
●出品作品	4~19
●須磨弥吉郎氏とそのコレクション	4~20
●作者紹介	21
●スペイン美術史略年表	22
●作品目録	23
●行事のお知らせ、人事異動	24



## スペイン美術展開催要項

名 称：スペイン美術展 ー須磨コレクションー

会 期：昭和54年4月28日(土)～5月20日(日)

(休館日 5月1日、7日、14日)

主 催：佐賀県立博物館

観 覧 料

	個人	団体 (20名以上)
大 人	200円	100円
大・高生	150円	70円
中・小生	100円	50円

会 場：佐賀県立博物館

(佐賀市内一丁目15-23 Tel 0952243947)

主 旨：須磨コレクションは、故須磨弥吉郎氏が、第二次世界大戦中スペインの特命全權公使として在任中、公務の傍ら、スペイン各地で収集されたもので中世から近代におよぶ油絵、板絵、彫刻類からなっている。

## スペイン美術の流れ

マドリッド市内、ブラド街に、スペインの陽を受けて白色に輝き、新古典主義様式の姿を誇るかつての王立美術館、ブラド美術館は、スペインの思想家で、美術批評家でもあったエウヘニオ・ドールスにとって「眠りに優る喜び」の場であり、また、「生に優る喜び」を得るところであった。

ブラド美術館は、「ルーベンス、ボッシュ、ティツィアーノをよく知るためにはブラドを訪れなければならないが、偉大なスペイン絵画の流れを展望し、正当に評価するためには、ブラドを出る必要がない」と言われるほど際立った特徴を示す美の宝庫なのである。

ここでは二つの主要な流れが見られる。ひとつは、日常世界のありのままを描こうとする一方、その世界から離れたもうひとつの未知の、底知れない世界を描き出そうとするフランドル絵画への愛着と、他のひとつは、ティツィアーノに代表されるヴェネツィア派への憧れである。このヴェネツィア派が、光と色彩が織りなす豊かで潤いに満ちた表現で、同じイタリアでも、ダ・ビンチやミケランジェロを生んだフィレンツェ派の近より難い美の世界とは別の感覚的世界を築いていたのである。そして、ブラド美術館におけるこの二つの流れへの傾きこそが、同時にそっくりそのまま、スペインの土壌が生み育てた、いわゆるスペイン派の画家の特徴をとらえようとするときのスペイン絵画のもう一方の特質の片側から見えた面の傾きでもあったのである。

このスペイン派の絵画の流れを、「宗教的」「人間的」と言われるスペイン美術の背景と、その変遷を追いなが

本展では、このうち12～13世紀頃に制作されたと思われる国内では見る機会が極めて少ない祭壇装飾の板絵、および木彫、石彫等をはじめ、油彩画では、20世紀スペイン美術の偉大な画家の1人、ソラナの作品を含めた秀作66点を選び、紹介する。

この展示を通して、スペイン美術、さらには西洋美術の本質を探り、一般市民の文化的意識の向上の一助として展覧するものである。

なお、このコレクションは、故須磨弥吉郎氏から昭和45年、長崎県立美術博物館に寄贈されたものである。

展示内容：油絵24点 (エウゲニオ・ルカス2点、マリアーノ・フォルトウニ5点、バスケス・ディアズ3点、ホセ・グティエルレス・ソラナ2点 他)

板 絵 18点 木 彫 17点

板彫刻 3点 石 彫 4点

ら辿ってみようと思う。またこの流れが、須磨コレクションにおいても、同じように垣間見られることができるのである。

4世紀後半に西欧世界を襲ったゲルマン諸族の民族の大移動は、5世紀に入ると、ピレネー山脈を越えてイベリア半島にその舌先を伸ばしてくる。すでにこの頃にはローマ帝国の威勢は衰え、5世紀の終わりには、ゲルマン系の西ゴート族が、スペイン王国を打ちたて、やがてトレドを都とするのである。西ゴート族はキリストの神性を否定する異端宗派であったが、ローマ・カトリック派との宗教的対立を経て、7世紀頃には、半島は、宗教的には完全に統一されたカトリック教の社会となっていた。

このカトリック社会に再び、南方からの侵入という新たな試練が与えられる。イスラム教徒であるムスルマン族の侵攻である。この8世紀初めのムスルマン・スペイン支配の下に、その生活を維持したスペイン人をモサラベ (Mozarabe) と言う。当時、首都はコルドバにあった。しかし、やがてこのヨーロップ第一の都として栄えたコルドバの衰えとともに、ムスルマン・スペインの政治的統一は失われ、それと同時に、トレド、セビリア、バレンシア等の各都市の割拠の時代となっていたのである。そしてまた、他方には、イスラム教徒の支配を逃れて、半島北部のけわしい山間に、信仰の日々を送ったキリスト教徒たちがいた。彼らのその後のイスラム教徒に対する抵抗と、やがて再び南下し、失われた国土の回復のための8世紀間にわたる反抗がレコンキスタ (失地回復戦争) である。この永続的な闘争あるいは運動は、イベリ

ア半島にほう大な数の兵士、修道士、植民者、芸術家を招来した。このようにして再びキリスト教徒の世界が広がるにつれて、それまで社会の主要な地位にいたムスリマン人は、こうした状態の下でも、従来のいとなみをつづけることができたのだ。それは、ちょうど、8世紀のイベリア半島におけるイスラム教徒のキリスト教徒に対する寛容さに見合った、キリスト教徒の態度であった。彼らムスリマン人をムデハル (Mudejar) と称している。

モサラベの美術 (初期ロマネスク美術) 10~11世紀に、カタルニヤから北スペインの山岳地方で、キリスト教小国家群は、イベリア半島の北部四分の一を占めるに至っていたが、イスラム教徒の勢力下に、自己の信仰を維持しつづけていたキリスト教徒、すなわちモサラベが、イスラム美術の影響を受け入れた美術活動をしていた。この時代の主要な作品は、写本のミニャチュールである。それは、コルドバの司教からセビリアのサンタ・マリア聖堂へ、953年納められた聖書の挿絵であったり、ペアトという修道士が著した「黙示録注釈書」をもってはじまりとする、いわゆる「ペアト」本の挿絵であった。

ロマネスク (Romanesque) 12世紀には北部スペインのカタルニヤ地方とアストゥリアス地方を中心に、壁画と板絵が多く制作された。これらは、イタリアからの芸術家によってもたらされたビザンチンの様式を踏んでいるが、一般に単純な形で描き、世代から世代へと意味が容易に理解される「約束的形像」の規範の中でも、スペイン美術の大きな特性のひとつである人間の情感をただよわせたものである。

ことにスペインには、他のヨーロッパ諸国ではほとんど見られない祭壇板絵が作られた。現在は、ロマネスク絵画では世界一のコレクションをもつカタルニヤ美術館に保存されているこれら板絵は、もともと山間の小さな教会にあつたもので、そこでは、祭壇を銀細工や宝石で敷りあげようとする経済的余裕はなく、また、そのような細工を施す工芸師を見出すこともできなかったであろう。ここにスペインにおいて、板絵が発達する理由があった。12世紀においてもっとも盛んであったこの祭壇板絵は、14世紀のゴシック盛期に入ると、壁画とともにその姿を消してしまう。こうした中から、やがて中世後期の聖堂の正画を飾る祭壇彫刻や祭壇画 (Retablo) が生れてくるのである。

ゴシック (Gothic) スペインのゴシック絵画は、4つの明確な段階に分かれる。第一は、ロマネスクの様式から発展した線的なゴシック様式で、これらは様々な祭壇板絵において見られる。第二は、14世紀後半に盛んになったイタリアゴシック様式である。13世紀のイタリアには、フィレンツェのジョットー (Giotto 1266頃~1337) などが従来のビザンチン様式を破って写実的な、しかも人間的なあなたたい画風をもった絵画を描いてい

たが、ロマネスク以来、こうした傾向をすでにもっていたカタルニヤ地方の画壇はたちまちこのフィレンツェの巨匠に傾倒する。こうしてスペイン美術史上、巨匠としての名をはじめて連ねるフェレル・バッサ (Ferrer Bassa 1348没)、セーラの三兄弟 (Jaume, Pere, Joan Serra) 等のスペインのゴシック絵画を代表する画家達が誕生したのである。第三に、14世紀の末にかけて、フランス、イタリア、ボヘミア、イギリスと一つの大きな連帯の中で広まった国際ゴシック様式が、スペインでは、15世紀に徐々に影響が現われてきた。それとともに、カタルニヤ地方には、フランドルの影響が入ってくる。最後のスペイン・フランドル様式である。この影響は、近代絵画の基礎を築いたフランドルの巨匠ヤン・ファン・アイク (Jan van Eyck 1390~1441) のスペイン旅行 (1427年) によってさらに強まった。この第4の様式は、見るものを、鏡面に映したようでありのままに描こうとするヤン・ファン・アイクの革新への適応として発展していった。こうして15世紀におけるスペイン美術は、イタリアの影響から離れて、北ヨーロッパの、新しい形式の中に、古いゴシックの伝統を保とうとするフランドル絵画との結びつきを強めていったのである。

ルネサンス (Renaissance) 15世紀末には、再びイタリアの様式が流入し始め、16世紀の最初の四半世紀でフランドルの影響はしだいに捨てられていった。しかし、こうした中においても、スペインは、その「中世」を捨てなかった。スペイン人は、人間の非合理性が抹殺されることに無関心であることはできず、ある種の現実性の強調という、絵画上の幻想に感動を覚えたのである。まさにエル・グレコ (El Greco 1541頃~1613) の世界にスペイン・ルネサンスは在ったと言える。エル・グレコは、故国クレタ島からビザンチンの伝統の古代イコンの影響をもたらすとともに、これらの要素を、彼がヴェネチアとローマで吸収したバロックとマンネリスティックの力強い表現で結びつけたのだ。

17世紀はスペインの絵画におけるもっとも目立った時代である。この間、偉大な巨匠たちが、いくつもの中心をなして現われた。

ベラスケス (Diego Velázquez 1599~1660) はセビリアで学び、1622年マドリードに出て宮廷画家となった。彼はスペイン絵画の頂点をつかった画家であるといわれるが、この本当の意味は、19世紀の印象派の創始者たちが、ベラスケスの絵を讃えたからではなく、まさに彼が、「人間的価値は、美、富、力などにあるのではなく、より深遠な、より感動的な、そして、悲しく劇的でさえある、存在する」という単純な事実そのものにある」とするスペイン美術の核心に生きていたからである。このベラスケスなくしては、ロココ主義からロマン主義の

熱情への移行にあってもっとも代表的な画家であるゴヤ (Francisco Goya 1746~1828) を知ることはできない。ゴヤは、このベラスケスの真実を追い求めて、近代美術の先駆者となり、「現代美術の予言者」となったのだ。

ロマン主義は新古典主義の人為性と手を切り、しばしば庶民の生活から引き出されたテーマにもどった。このような趨勢はアンダルシアで多くの追随者をもった。

もう1つの傾向は、ゴヤによって設けられたコースである。さらに、歴史的場面を写生しようとする絵画が、この時代の後半にめざましい展開をみたのである。この流れが、のちに風俗画として発展し、各地方の生活の描写へと進んでいったが、このような画家の一人にフォルトウニー (Mariano Fortuny 1838~1874) がいた。

この同じ時期に、風景画は、独立したジャンルとして発展していた。19世紀も終わるころスペインにおいてカ

ルロス・アーエス (Carlos de Haes 1829~1898) によって始められた印象派は、ソローリャ (Joaquín Sorolla 1863~1923) の印象主義をたんに後進うものでしかなかったのである。

20世紀のスペインの画家は3つに区別されている。1つは、パリの画派に加わり、世界の絵画の顔を形づくっていた画家——ピカソ、ミロ、ダリなど——であり、つぎにベネディット (Manuel Benedito 1875~) 等に代表される伝統主義的な画家である。そして第三に様々な価値を結合しようとする画家たちがいるが、彼らの出発点に、ソラナ (José Gutiérrez Solana 1886~1945) の孤独で、劇的、深淵な絵画世界があったのだ。

## 出品作品



2. 聖体拝領 (54.0×68.0)



6. 田舎女とろば (31.0×19.5)



1. 闘牛士 (32.0×16.5)



5. 馬小屋 (38.0×42.0)



3. テトウアの戦い (76.0×140.0)



4. テトウアの戦い (76.0×140.0)



7. 自画像 (47.5×41.5)



8. アンヘル・リスカーノの家族 (35.0×44.0)



12. 裸婦 (198.0×109.0)



14. 勇敢な人ホルヘ (108.0×108.0)



13. アイドルたち (237.0×247.0)



9. 霧 (57.5×85.0)



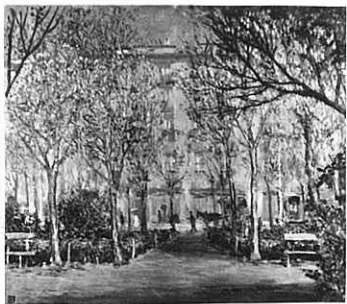
16. 田舎の謝肉祭 (79.0×65.0)



17. 田舎の謝肉祭 (71.4×51.0)



11. シウダ・レアルの街 (82.5×74.5)



10. レコレトス街 (83.0×93.0)



19. 十二使徒 (22.0×34.0)